



20歳ころのみすゞ

郷土が誇る『童謡詩人』 金子みすゞ

長門市が生んだ薄命の女流童謡詩人金子みすゞの童謡全集が、その没後五十五年を経て、この三月に発刊されました。その発刊祝賀会が、みすゞの命日である三月十日に、ゆかりの人々が集って、仙崎の橋長旅館で、盛大に開かれました。

今日まで、長門の地元の人々でも、誰一人として、みすゞの残したすばらしい仕事の、理解者はいませんでした。

その中で、一人みすゞを求めて、十六年にわたり研究と調査を続けて、今日、みすゞを世に出した人が、東京出身の作家矢崎節夫氏であります。

この記念すべき、みすゞの五十五回忌にあたり、市民の皆様にも、金子みすゞを紹介したいと思います。

仙崎錦町の魚秀のお店が、みすゞの幼時から育った本屋のあった処で、その本屋は木村書店がついて、いまもローマ字で、「かねこ」と落書した書棚が残っています。

明治三十六年四月十一日生まれのみすゞの本名はテル、瀬戸崎小学校（仙崎小学校）から大津高等学校（深川高女・大津高校）へ進みました。

小学校時代のみすゞは、色白のぼつちやうしたかわいい子で、決

赤崎山公園に建てられた碑の、
「露」は、特集号（大正十五年）で特選になったものです。そのころにみすゞの創作した童謡は五百十数編にも及びました。

昭和二年の夏、西条八十は下関駅のプラットホームでみすゞと逢い、昭和六年「下関の一夜、亡き金子みすゞの追憶」という一文をのこしています。

「彼女は、まさしく当時の若い童謡詩人の中の巨星であつた。：彼女が、実に日本の女性としては希有の想像力の飛躍を持っていた。作品においては、英国のクリスティナ・ロゼッティ女史におとらぬ華やかな幻想を示していた。」と書いた。背に一歳の児を負って、不断着のままのみすゞに「裏町の小さな商店の内儀のようであつた。しかし、彼女の容貌は端麗で、その眼は黒曜石のように深く輝いていた。」と

八十にあつた昭和二年は、みすゞにとって不意な結婚をし、子どもが生まれ、不遇な時期であつたと思われまふ。その前年、雑誌「童謡」は廃刊になっていました。この年八月、祖母ウメの死去で、葬儀法要のため二度仙崎へ帰っています。

昭和三年、みすゞは病に臥し、その後ずつと健康はすぐれず、同年末には童謡の筆を絶つてしまいました。ただ、娘ふさえの片言を「南京玉」とタイトルして、小さ



福田市長から矢崎節夫さんに感謝状の贈呈

な手帖に書きとめています。

その後、夫婦関係は破綻をきたし、昭和五年二月二十七日離婚、ふさえをめぐる複雑な事情もからんで、みすゞは最後の決意をします。

三月九日、自分の気に入つた着物を着て、写真館に行き写真をとっています。愛娘に自分の姿を残しておきたかつたのでしよう。帰り道で桜もちを買い、夜家族とともに明るいふんい気で食べました。そして、数通の遺書をしたため

睡眠薬を飲んだのです。遺書には「今夜の月のように私の心も静かです。」とあつたそうです。

「大漁」の一篇の童謡につよく心うたれてから、十数年をかけてみすゞを世に出した矢崎氏と、西条八十に送った三冊の童謡集の複本を、波乱にみちた半世紀、大切に保管されていたみすゞの弟の雅輔氏をはじめ、多くの人々の協力

で全集が出版されました。去る三月十日、みすゞが眠る仙崎遍照寺で追善供養をし、出版記

念祝賀会が仙崎で催されたことは、郷土のものとして誇らしいことであり、喜ばしいことであります。

「みすゞの詩」

大漁

朝焼 小焼だ

大漁だ

大羽鰯の

大漁だ

浜は祭の

ようだけど

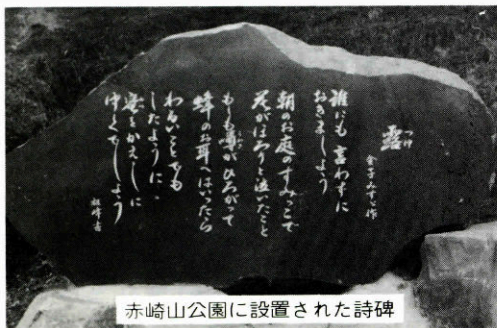
海のなかでは

何万の

鰯のとむらい

するだろう

「みすゞの会」が、みすゞについて、月一回いろいろ研究しあっています。連絡先 中央公民館



赤崎山公園に設置された詩碑